自然史のなかの社会と経済

藤　岡　　惇

「……生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから，人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。」
（灰谷健次郎『太陽の子』）

「…近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。…・正しく強く生きるとは，銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」
（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）

1．「自然のミレニアム」にむけて

キリスト誕生から最初の千年紀〈ミレニアム〉の間，ヨーロッパでは人間の生命と能力は，全能の神様に帰属しているとみなされていました。人間は，いわば外部の全能者にかしづく下僕となりましたので，「神のミレニアム」といってよい千年間でした。

第２のミレニアムに入ると，「神の専制」への反発から人間復興運動がおこり，しだいに人間が神にとってかわるようになりました。人間は自らを自然環境の外におき，自然を支配と征服の対象だと考えるようになったのです。こうして第２の千年紀は，しだいに「人間のミレニアム」という色彩を濃くしてい

きました。自己を中心として，世界が回っているという天動説のような観念論的思考に染まるようになりました。その結果は，自我のエゴ化と精神病のまん延，核戦争，地球環境の危機でした。

第３のミレニアムの課題とは何でしょうか。あらゆる「いのち」が輝かないかぎりは人間の「いのち」も輝けない世紀，万物の霊長にふさわしく「高貴なものには義務が宿る」（ノブレス・オブリージ）という倫理に目覚め，地球環境全体をケアする義務を引き受ける世紀になることだと，私は考えています。「神のミレニアム」と「人間のミレニアム」双方の弱点を補正した「自然のミレニアム」への転換が望まれているのです。

ところで「自然のミレニアム」を支える経済（略して「自然体の経済」）とは何でしょうか。次の４つの課題の解決をめざす経済のことであり，たとえ社会的弱者であっても，課題の解決に無理なく誘っていけるタイプの経済のことだと，私は考えています。それでは，「自然体の経済」が解決しようとする４つの課題とは何か。

第１に，環境破壊による人類の緩慢な大量死を避けることです。人類は，二酸化炭素を炭素換算で年間60億トン排出していますが，気候を安定させようとすると20億トンのレベルまで下げなければなりません。タイムリミットは，2030年頃だといわれます。それまでに二酸化炭素の排出量の１/３化の達成は必須の課題なのです。ただし発展途上世界の絶対的な貧困と人口増を考えると，地球上で生み出す富の総量を２倍程度に増やすことが必要でしょう。１/３の化石エネルギー（石炭・石油・天然ガス）を用いて富の総量を２倍にするには，化石エネルギー１単位あたりの富の生産性を６倍に引き上げる必要があります。今日の条件のもとでは，労働の生産性の安易な引き上げは，大量失業を生み出すだけです。人間を失業させるのではなく化石エネルギーのほうを失業させる，そのようなエコ産業革命に成功するかどうかがカギとなってきたのです。[1)]
そのためには，大量のエネルギーが必要な物財の生産を減らし，エネルギーをあまり使わずに生産できる「サービス財」の比率を高めていくことも大切となるでしょう。「物事」という言葉がありますが，モノの豊かさの追求はほどほ

どにして，コト（関係）の豊かさ――人間関係の豊かさ，自然との関係の豊かさのほうを追求する。「おいしいモノを食べたい」から「おいしくモノを食べたい」への転換です。

第２に，貧富の格差の拡大，貧困のまん延をどうするかという問題です。じっさい「社会主義」経済圏の解体にともなう大量の失業者の発生，マネー移動のグローバル化，労働者をお払い箱にする情報技術（IT）の発展のおかげで，デフレーション（物価の低下を伴う不況）が生まれ，労働・人権・環境基準の切り下げを競う「下向き競争」が激化するようになりました。今や世界の労働人口の１/３にあたる10億人が失業ないし半失業状態になっています[2)]。日本でも，生活不安が消費不況を激しくし，大量の失業者を生んでいます。「下向きの生存競争」を規制し，多数者の懐を暖めていかないかぎり，デフレ不況は泥沼に陥るばかりでしょう。

第３に，無差別のテロ，これにたいする国家テロや戦争の応酬といった，憎悪と暴力の悪循環を何としても避けるという課題です。すでに日本と韓国だけで68基の原子力発電所が操業しています。チェルノブイリ級を上回る大型原発が多いのが特徴です。もし米軍と北朝鮮軍とが戦端を開けば，核兵器が使われなかったとしても，大型原発の炎上は避けられないでしょう。人類が戦争を絶滅しないかぎり，戦争の方が人類を絶滅させてしまう。そんな時代が，なお続いているのです。「ハングリー（空腹）はアングリー（怒り）を生み出す」といわれますが，環境の劣化，貧富の格差の拡大を是正しないかぎり，またすべての人に正義を保障し，自立と自己実現の機会を保障しないかぎり，憎悪と暴力の悪循環を防ぐことはできないでしょう。

最後に，人間性とアイデンティティ（自分とは何であるかの認識）の危機の問題です。経済開発の努力のなかでモノづくりが重視され，この間にモノの品質は大変良くなりました。しかし人間開発（ヒトづくり），社会開発（コトづくり）のほうが軽視されてきた結果，ヒトの「品質」のほうはあまり改善されず，関係の貧しさも際だってきました。わが国でも，閉じこもりとストーカーが増えていますが，自分とは何であり「何のために生きたらよいか」が分からなくな

った若者たち，家族やコミュニティ（地域社会，コミュニケーションを通じて自他分離の克服をめざそうとする社会空間のこと），大地や宇宙に根を下ろせなかった「一人ぼっちの魂たち」が，悲鳴をあげています[3)]。

これら４つの課題をトータルに解決していくには，どうしたらよいのか。いま世界中の人々が考えています。ただし人間とは弱い者です。貧しい社会になればなるほど，道徳の説教だけでは世の中は変わりません。「そうしたほうが得する」（少なくとも「損はしない」）しくみ，いわば「徳が得になるような経済システム」を形成することが必要なのです。以下では，そもそも「経済」とは何であり，どうしてこのような問題が生まれてきたのかを考えてみようと思います。

２．自然のなかから社会が生まれた

「…［万物の霊長たるにふさわしい］雅量を私たちがもつようになるとき，…私たちには…「高貴な身分には義務が伴う」ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。」

（E・F・シューマーハー『スモールイズビューティフル』）

いのちの尊厳，人間の尊厳

ここで，手をかざしてください。手を光にむけてかざしてください。手の先，指のあたりがキラキラときれいに輝いていますね。この手を宇宙と生命の進化図にたとえると，人間はどのあたりに位置しているのでしょうか。

話は，137億年前といわれるビッグバン直後にとびます。当時の宇宙には，もっとも単純な元素――水素とヘリウムしか形成されていませんでした。核融合を起こして，より複雑な元素をつくりだすためには，大変な高熱が必要だったからです（水素爆弾の核融合反応に点火するには，原子爆弾の爆発熱が必要だったことを思い起こしてください）。軽いガスで出来た原始星がつぶれて，最後に大爆

発をおこすようになってはじめて，その熱の力で，炭素・鉄といった複雑な原子核をもつ元素が生み出されました。このような固体元素が集まって，重く大きな星が形成されていきます。この種の星の最後は，すさまじい超新星爆発となりますが，そのおかげで，もっと複雑な原子核をもつ元素（金や銀など）が生み出されてきたのです。「一粒の麦，もし死ななば，数千の生命を結ぶことなし」という言葉がありますが，わが身を犠牲にした星たちの大爆発，このすさまじい「宇宙の陣痛」のなかから，私たちの体を形づくる元素が生みだされてきたのです。私たちの体の元素組成比は，超新星爆発直後の元素の組成比とほぼ同じだといわれます。「君たちは，星（の大爆発）のかけらだよ」[4)]と天文学者が説くのには道理があるのです。

今から36億年近くまえ，地球の「原始の海」のなかで，最初の生命体が現れました。私たちが胎児の時には，母親の子宮をみたす羊水のなかに浮かんでいますが，その羊水の成分が，じつは36億年前の「原始の海」の成分と同じだといいます。不思議な符合ですね。

生命体誕生から26億年の間は，細胞分裂という無性生殖が，繁殖の唯一の方法でした。そこには個体の死はありません。細胞分裂にもとづく永遠の生を生物たちは満喫していたのです。およそ10億年前に，雄と雌とが互いの DNA（遺伝子コード）を交じり合わせ，子を生みだすという有性生殖が始まりました。そのときに個体の死が始まったのです。高等生物たちは，セックスの歓びを味わう代償として，死の恐怖を味わうようになったのです。[5)]

それはともかく，有性生殖の積み重ねのなかで，子孫に引き継がれる DNA は高度で複雑なものになり，その最高の精華として人類が誕生します。生物の進化の歩みを手で表したばあい，その最先端の指先のところに，「自然が自分自身の意識にまで到達している存在」たる人間が生み出されたのです。

一人の人間のなかに75兆の細胞が活動しているといわれます。癌細胞を例外として，すべての細胞が協力しあって，人体の健康を創っています。心臓は，一日に８万回も鼓動し，全長15.4万キロにたっする血管に毎日2.4万リットルの血液を送り出しています。よく生物学者は，「人間とは36億年の DNA だ」

と述べますが[6]，一人の中に含まれるDNAの総延長は，1280億キロ――地球と太陽との間を400回往復する長さになるといいます。私たち一人ひとりの「いのち」のなかに宇宙があるというか，宇宙の進化が凝縮されているのです[7]。

「いのち」は，なぜ尊いのでしょうか。わけても人間の「いのち」は，なぜ尊いのでしょうか。75兆の細胞が，1280億キロのDNAに導かれて精妙な協同活動を行い，自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからです。宇宙自体が，ついに自らの姿を捉えるために「宇宙の眼や耳」にあたる存在をつくりだした。まさにその「宇宙の眼や耳」にあたる存在が私たちだからです。私たち一人ひとりが，137億年の歳月をかけて，宇宙自身が作り上げてきた最高傑作であり，生きているだけで無条件に尊い存在だということを，頭ではなく体で納得してほしいと思います[8]。

迷信や非合理主義の落とし穴

科学的社会主義の創始者の一人，フリードリッヒ・エンゲルスは，このプロセスをつぎのように説明しています。宇宙の物質進化は「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」＝高等動物を生み出した。「物質がどんなに変転しても永久に物質でありつづけ，その属性のどの一つも失われることはありえない。またそれゆえ，物質系は，地球上でその最高の精華たる「思考する精神」を生み出した後に，消滅させてしまうこともあろうが，そのばあいでも，鉄の必然性をもって，この思考する精神をいずれかの場所，いずれかの時に再び生み出すにちがいない。」「われわれは肉と脳髄ごと自然のものであり…人間はますます自分が自然と一体であるということを感ずるようになる。」その結果，「あの精神と物質，人間と自然，魂と肉体との対立という不合理で反自然的な観念は，ますます不可能になっていくであろう」と[9]。

宇宙には，どこまでいっても，107の元素とその組合せとしての分子以外の物質はありませんし，光の速さよりも早く伝わる運動も存在しません。ですから死後の世界にも，「霊」が残り，幽霊となって生きている人にたいして，「祟り」（たたり）を及ぼすといったことは起こる余地がないのです。かりに「超自

然的な存在」が，宇宙の果てからメッセージを送ってきたとしても，137億年たたないかぎり，その「意思」は私たちに伝わりようがないのです。何か「霊的な存在」（神）が宇宙の外から私たちを操ることで，宇宙の進化発展が進んできたのではなく，宇宙の物質系自体が，より複雑で個性的なものに進化発展するパワー，「自己組織化」する内的傾向を兼ね備えているのです（このような見方・考え方を「弁証法的唯物論」といいます）。ジョン・レノンが，「イマジン」のなかで「神様などいないと想像してごらん」と歌いましたが，幽霊やオカルトの世界にはまりこむことは，科学の成果の冒涜（ぼうとく）であり，人間性を破滅させる危険な道です。

「自然の掟（おきて）」に従うということ

「地球村」というNGOの高木善之さんが説いているように，36億年の進化のなかで，生物たちは互いに必要最小限の資源・獲物しかとらず，他の動物たちとの無用の争いを避けてきました。必要最小限という掟と調和・共生という掟――この二つは，「自然の掟」（自然法）だったのです。[10)]

人類の遠い祖先は，500万―600万年前，アフリカの密林でサルと共通の祖先から分かれ，二本足で歩くようになりました。現代人の共通の祖先は，16―20万年前にアフリカから他地域にむけて「第２の拡散」を行い，多様な自然風土に適応するなかで身体的特徴を変えていったといわれます。したがって現代人は，共通の祖語（祖先の言語）をもち，遺伝学的に非常に似ています。生物学的には単一の人種に属しているのです。しかし気候環境の影響をうけやすいことから，肌の色や体型・骨格といった外形の姿は多様となりました。同一の車種であっても塗装の色によって，車の外形は多様なことと似ていますね。人類は異なる「人種」からなっており，その違いによって人間の能力・特質は左右されるという「人種主義」の考えは，人間を外形から判断する愚を犯しているのです。[11)]

それはともかく，私たちの祖先は，しだいに社会を形成するようになり，いつしか自らが自然的動物であることを忘れ，自分を家畜のような安楽状態にお

き，体全体を脳化していきました。その結果，自らを自然の外部に置き，自然法に反する「社会の掟」を作るようになったのです。「不必要最大限という掟」と「競争という掟」がそれです。人間がつくりだした「社会法」は，自然法と対立する内容のものになっていきました。

３．社会のなかから市場経済と資本主義が生まれた

「大人の人たちに『桃色のレンガでできていて，窓にジェラニウムの鉢がおいてあって，屋根の上にハトのいる，きれいな家を見たよ』といったところで，どうもピンとこないでしょう。大人たちには『10万フランの家を見た』と言わなくてはならないのです。すると，大人たちは，とんきょうな声をだして，『なんとりっぱな家だろう』というのです」

（サン・テグジュベリ『星の王子さま』）

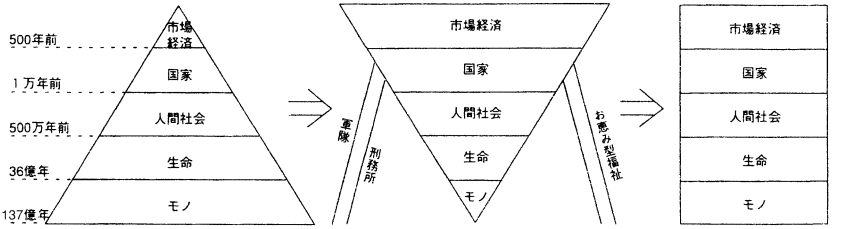
「経済のない道徳は寝言である
　しかし道徳のない経済は犯罪である」
（二宮尊徳[12]）

社会からの国家と市場経済の分離

一万年ぐらい前の農業革命のなかで，人間社会の中から，専門的な兵士と役人，国家，政治というものが生み出されました。五百年ぐらい前に，社会からの第二の大分裂が発生しました。社会から経済が分離して，「市場経済」という独自の論理で動く不思議な魔物が生み出されたのです。この分離独立のプロセスを図示したのが，**図－１**の左側の三角形です。

そのなかで，パワーと資源とは，どんどん自然から社会へ，ついで国家と経済へと吸い上げられ，正三角形の形をしていた人間社会が，中央部のような逆三角形の形に変わり，肥大化していったのです。

世界の化石エネルギーの年間消費量（石油換算）をみると，西暦1800年ころは900万トンでした。マルクスが『資本論』第一巻を書き上げた1867年には１億



図―1　モノ・生命・人間社会・国家・市場経済（資本主義）の捉えかた

4300万トン，1900年には6億300万トンとなり，第2次世界大戦の終わった45年には13億1100万トンとなりました。本当の激増はその後に始まり，97年には83億3400万トン（原子力と水力発電を含む）になったのです。今日ではマルクスの時代のじつに60倍というエネルギーを消費し，地球の自然と人間の心身を傷つけています。このような逆三角形の形は，肥大化すればするほど不安定となり，グラグラしやすい。そこで国家による安定装置――軍隊と刑務所，および「お恵み型の福祉」という「つっかえ棒」で支える必要がでてきたわけです。

昔は，自然の資源（自然資本ストック）は豊富で人工資本が不足していたので，人工資本ストックの拡充こそが経済発展の決定的な要因となっていました。ところが今日では，人工資本，なかでも民間企業が持つ私的な人工資本のほうがあり余るようになってきた。それにたいして，「自然資本」（自然資源の質と豊かさ）や「社会関係資本」（地域社会や家族の協同能力の高さ），あるいは物的な「社会資本」（道路や港湾施設，学校といった社会の共有する資本で，インフラストラクチュアともいう）が枯渇する時代となってきたのです。このような時代には，自然資本や社会関係資本，さらには社会資本（インフラ）の拡充のほうが，経済発展を主導する要因となっていきます。[13)]

一例をあげると「自然資本」の豊かさを測る重要な指標は，その地域の土壌のなかに，どれほどの微生物が生きているかです。ミミズがいるような肥沃で健康な土を一握りすれば，そのなかには60億匹の微生物が棲み，有機的な生物世界を育んでいます。人間の総人口と同数の微生物が，一握りの土のなかに棲

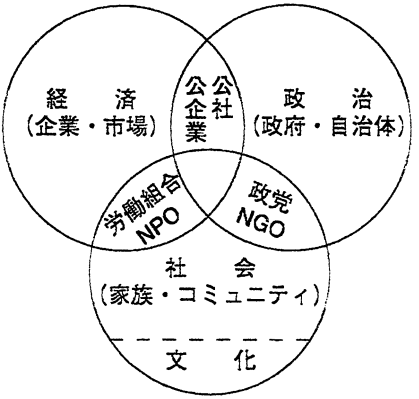
んでいるのです。デンマークの植林事業（後述）が示したように，まず木を植え，雨を呼びこみ，土を肥やすことは，その上に棲む動植物を健康にし，健康な人体，健康な社会・経済を作っていくうえでの根本条件なのです。[14)]

このようなしだいで，「人間のミレニアム」をどう「自然のミレニアム」に転換するか。「自然の掟」に従う方向で，どのようにして人間法と社会システムを作りなおしたらよいのか。市場価格に「エコロジー的な真実」を反映させるには，市場システムを放任するのではなく，事前に計画的に設計しておかねばなりませんが，どうすればよいのか。自然法と生命体のルールにしたがって，地域社会，都市，経済をどのように作り変えたらよいのか。これらが21世紀最大の課題となってきたわけです。自然の秩序のなかに社会を正しく位置づけ，社会のなかに経済を正しく位置づける課題，市場経済と国家をふたたび社会と自然の中に埋めこんでいく課題に直面しているのです。先の図を用いると，不自然な逆三角形を右側の正方形のような安定した形に変える課題に直面しているわけです。[15)]

人間生活の３つの領域

これまで人間社会を歴史の経過という流れのなかで見てきましたが，この流れを現時点で固定し，輪切りにしてみましょう。そうすると人間の24時間の営みは，経済，政治，社会（および文化）という３つの領域に分かれることに気づきます。たとえば会社員のＡさんのばあい，会社への通勤・仕事といった「経済」活動のために12時間，食事と睡眠，子どもの相手，読書といった「社会・文化」活動のために10時間，友人との政治談議や投票所にいくといった「政治」活動のために残りの２時間を費やすといった風にです。３領域の相互関係を描いたのが，次の**図―２**です。

第１の人間生活の領域は，「経済」と呼ばれています。生産（モノづくり）と流通（モノを最終消費者まで届ける活動）に関連した領域です。現代では市場と企業が主な担い手となり，市場財を生産し，利潤原理で動いています。



図－2　人間活動の３領域の相関

第２の領域は，「政治」と呼ばれ，モノと人の管理・統治・防衛が任務となります。政府や自治体が担い手となり「公共財」を生み出します。計画原理にもとづいて運営されているのが特徴です。

この２つの領域は，凶暴な自然や敵兵をあいてにして，がぶりと組み合った真剣勝負の世界です。相手の動きにあわせて，こちらの動きも決まってくるという意味で，「必然性」が貫きやすい世界であり，伝統的に男性の仕事とされてきました。試みに世界の民族博物館に行かれるとよい。どの民族も，生産のための農具や運搬手段，戦争のための武器については，似通ったものしか生み出せていません。真剣勝負の世界では，「遊び」や「空想」といった観念の自由な飛翔を許すゆとりがないからです。兵士や企業戦士たちの行動は予測がつきやすく数式で表わしやすい反面，彼らの「自己責任」を追及しがたくなるのは，そのためです。

これにたいして，休息時間に営まれる「食文化」「学び」「音楽」「宗教」といった領域では，「遊びの余地」が大きく，民族ごとにじつに多様・多彩で創造的な活動を展開していることに気づかれるでしょう。この第３の領域は，真剣勝負の仕事が終わった後の――生み出され，防衛された後の「モノの享受＝消費」に関連する領域です。モノの消費の場で，性行為が営まれ，子どもの養

育・老親のケアがなされ，自己と家族の生命が再生産され，地域社会の人間関係も育まれますから，「人づくり」「コトづくり」の領域だといいかえてもいいでしょう。この領域のことを総称して「社会」と呼びます。協同原理にもとづいて運営されてきた伝統をもち，女性の仕事とされてきた領域でもあります。

この「社会」領域のなかでも，もっとも自由度・遊び度が高い部分，カントのいう「目的なき合目的性の世界」[16]の活動を「文化」と呼んでいます。真剣勝負の終わった後の休息と余暇の時間に，人は，夢を見たり，人生の意味をとらえかえそうとします[17]。人生体験のなかで自らの得た感動と教訓を多様な手段を用いて表現し，同胞に伝達しようとする活動を「文化」と呼んできたのです。

このような人づくり・コトづくりの領域のことを，一括して「社会・文化」と呼ぶことにしましょう。家族・コミュニティ・学校・労働組合・文化サークルが担い手となり，経済や政治の領域と比べると，多様な可能性を秘めた領域となります[18]。

３領域の相互関係

先の図が示すように，社会領域と経済領域とが重なりあう部分があります。非営利団体（NPO）や協同組合・労働組合など，非営利という社会的原理にもとづいて経済活動を行おうとする団体が活躍する領域です。社会領域と政治領域とが重なりあっている分野は，非政府組織（NGO）や政党など，非営利という社会的原理にもとづいて政治活動を行おうとする組織が活動するところです。経済領域と政治領域とが重なる分野では，公社・公団や公営企業が活動しています。

人間社会を１台の自動車にたとえてみると，「経済」とはいわば動力源（エンジン）にあたり，「政治」はハンドル，「社会・文化」はブレーキにあたります。自動車の運行を支える道路は，さしずめ「自然」だといってよいでしょう。いずれの機能を欠いても自動車の安全運転は不可能ですね。人間社会の存続と発展のためには同様に，これら３領域のバランスのとれた発展が求められるのです[19]。

資本主義国のタイプの違い

経済，政治，社会・文化の３つの領域の組み合わせかたによって，同じ資本主義国といっても，そうとうの質のちがい，タイプの違いが生まれてきます。たとえば，アメリカ型の資本主義のばあい，経済（市場）領域が異常に肥大化しており，強烈な影響力をもっているのが特徴です。閣僚たちには，経済界の代表が任命されることが多いですし，政治の世界にも市場の論理が貫きがちとなります。また社会（人づくり）も経済の論理で左右されることが多くなります。[20)]

他方，日本や東アジア諸国のような「重商主義」ないし「開発主義」タイプの資本主義国のばあい，国家の官僚機構が主導的な役割を果たしてきました。国家が強力な窓口指導と産業政策をとおして，経済領域を指揮し，支援することが多くなりますし，教科書検定をとおして，人づくりの領域にも影響力をふるいます。

これにたいして，北欧型の資本主義のばあい，社会・文化領域が相当に自律的な活動を展開し，他の領域のありかたに大きな影響力を発揮してきたのが特徴です。北欧型の社会では，「社会・文化」部門が発展し，NPO・NGO の旺盛な活動を生み出し，国家権力と企業権力の暴走を監視し，チェックする力を育んできたのです。そのため資本主義のもとでも，一定の範囲で民主主義が根付きます。国政選挙での投票率は，米国のばあいは３割から４割台ですが，北欧諸国のばあいは，８割から９割に達することが普通です。

北欧型の近代化――民主化の教訓

北欧の地というのは，中世以来好戦的なバイキングが侵略をくりかえし，暴力と戦乱の絶えないところでした。その後はノールウェイをめぐってスウェーデンとデンマークがあい争い，両国の争いに北方への領土拡大を狙うプロシアがからんできたのです。それから150年をへて今日では，この地は戦争がおこるなどと想像さえできない「平和地域」に変貌をとげました。第２次大戦後になると「平和地域」形成の試みは，欧州全域に広がり，いま欧州連合（EU）

の形成に結実しつつあります。このような経験はどうして生まれたのか，デンマークの事例をもとに考えてみましょう。

第１に，北欧の覇権をめぐるプロシアとの戦争（1864年）の敗北，ユトランド半島南部の割譲がきっかけとなって，デンマーク国民は覇権戦争に走る愚を悟り，「外に広がるのではなく，内を耕そう」という「内発的発展の道」を選んだことにあります。除隊した工兵士官のエンリコ・ダルガスは，貧農多数を組織して，1866年にヒース協会を設立し，ユトランド半島北部の荒地に植林しようとしました。ヒースしか生えなかった100万エイカの荒地は，豊かな森林と農地に変わりました。その結果，雨がよく降るようになり，気候は温和となり，土壌が肥沃になったのです。豊かな有機質の土壌は，植物を健康にし，そのうえで動物と人間を健康にする役割をはたしました。

第２に，協同組合運動による経済繁栄です。元来この地は，小農民の多い土地でしたが，1870年代になると，この地の穀作農民たちは，ロシアと米国の大規模経営との国際競争に負けて苦境におちいりました。困難に直面した小農民たちは，1882年から99年の間に700もの酪農協同組合を設立し，孤立した穀作農民から協同組合型の酪農農民に転身していきました。おかげで，彼らは国内の酪農生産額の70％を支配しただけでなく，「世界の工場」となった英国の乳製品市場を支配するなど，抜群の国際競争力をもったのです。

第３に，このような経済的基盤のうえで，小農民や都市庶民を開明的で進歩的な市民に育てるための生涯学習運動が花開きました。ラディカルな教育家グルンドヴィの影響のもとで，「民衆学校」が各地で開設され，学生数は1866年の1000人から1914年には8000人に増えました。彼らが，農民を母体とする左翼党を躍進させる支柱となりました。

最後に，左翼党と都市を基盤とする社会民主党とが労農同盟を結ぶことで，1901年に政権を奪取し，この国を「平和と民主主義」を重視する福祉国家に変えていきました。おかげでデンマークは，貧富の格差の比較的小さな，連帯感のある国となっていったのです。

困難な時こそ，民族の真価が問われるものです。1941年にデンマークはドイ

ツ軍によって占領されました。しかし苛烈な占領下にあっても，反ユダヤ主義を鼓吹する親ナチ勢力は，ほとんど根付きませんでした。その結果，同国にいた8500人のユダヤ人は匿（かくま）われ，そのうち９割は，隣の中立国のスウェーデンに脱出できたのです。大戦末期になると，隣国のノールウェイとともに，ドイツ軍への協力を拒否する非暴力抵抗運動が壮大な規模で展開され，占領支配を内部から瓦解させていく原動力となりました。[21)]

日本型に迫られる「構造改革」

現在，日本の社会では，米国の圧力のもとで「構造改革」が迫られています。この「構造改革」とは何でしょうか。①国家・官僚機構が主導的な役割をはたしてきた日本・東アジア型の経済はアブノーマルである。②これにたいして大企業と市場が主導的な役割をはたしてきた米国型モデルは，90年代の世界経済で一人勝ちしたモデルであり，これが「世界標準」だ。③したがって日本型モデルの「構造」を米国型に改めるべく「改革」せよというのです。

しかしこの議論には，数多くの誤りがあります。なぜなら①90年代の米国経済の一人勝ちの主因は，米国型モデルの優秀さにあるからではないのです。そうではなく，冷戦期に米国の軍事部門が「含み資産」として抱えてきた軍事と諜報の技術，とくに情報通信と宇宙分野の技術を商業世界に開放し，これでもって日本企業と対抗しようとしたところにあるからです。②また米国型モデル自身，現在，バブルの崩壊から花形企業のスキャンダル倒産など，「市場の失敗」の現象に見舞われています。③日本では，バブルの崩壊を契機に，デフレ不況の局面に立ち至るなど，壮大な「市場の失敗」の時代を迎えました。このような状況下で，資源とパワーを不用意に国家部門から民間企業部門に移したばあい，いっそう深刻な「市場の失敗」に見舞われる心配があるからです。

むしろ日本人にとって参考になるのが，市民社会の領域を強め，政治と経済，社会の３つの領域の間で多元的なバランスをとろうとしてきた「北欧型モデル」の経験です。国家部門に必要な資源はしっかりと確保したうえで，住民参画のパワーによって官僚制の不効率と不正をチェックしたうえで，国家部門の

資源とパワーとを経済領域ではなく社会領域のほうに移していくといった，もう一つの選択，もう一つの構造改革の道があるのです。

４．エコ・人間中心の経済を創ろう

「もっとも大切なものは　みなただ
太陽の光　野や山の緑　雨や川の水　朝夕の挨拶…そして母の愛」
（河野　進）

「変えることのできるものを変える勇気と
　変えることのできないものを受け容れる心の優しさと
　いずれであるかを見分けることのできる叡智を私に与えてください」
（ラインホールド・ニーバー『平安の祈り』[22]）

21世紀が，「環境＝いのちの世紀」にならないかぎり，私たち人類の未来はありません。私たちは，「万物の霊長」ではなく，じつは「万物の癌細胞」にすぎなかったことが露見し，滅んでいくだけでしょう。「環境」というのは人間の作り出した経済システムの一部ではないのです。「環境」というのは，36億年近く続いてきた地球における生命の流れのことであり，そのような環境＝生命のシステムの内部の片隅に経済システムが生まれてきたことを，まずしっかりと自覚してください。「丈夫な頭と賢い体」を鍛えてください。そのうえで，冒頭に述べた４つの人類史的な課題の解決めざして「自然体の経済」（エコ・エコノミー）づくりにとりくんでほしいと思います。

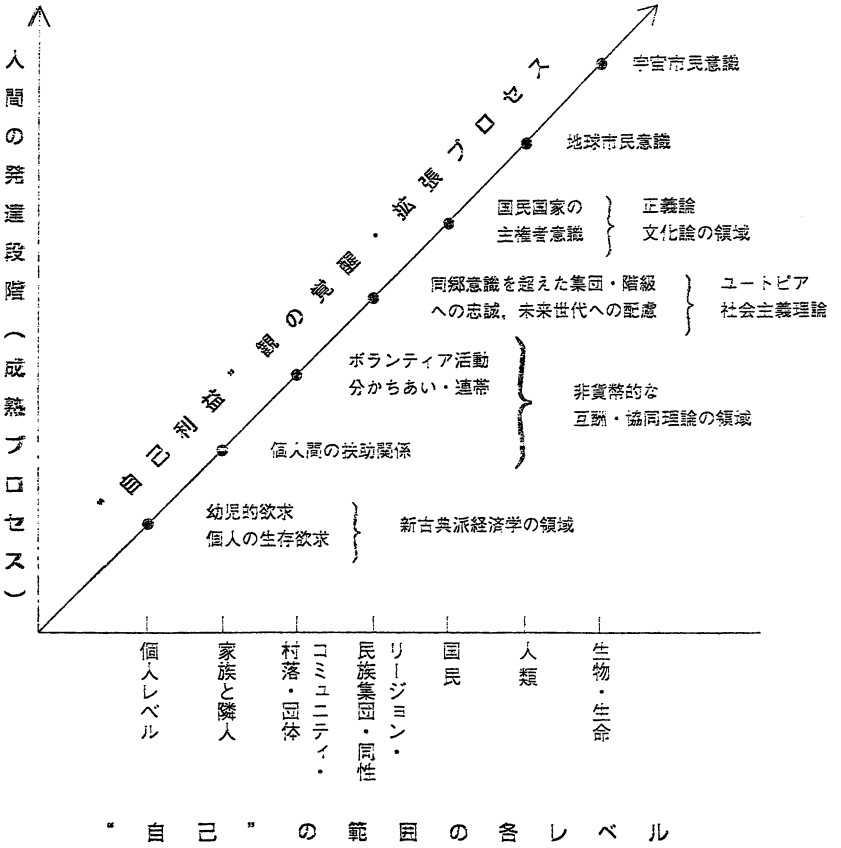
そのために，必要となる点を４つ指摘して，本稿を締めくくりたいと思います。

主流派経済学の人間観の誤りの克服

新古典派経済学では，人間は，個人として，「自己利益」を追求するという想定をしていますが，そのばあいの「自己」とは何でしょうか。近代の主流派

経済学では，手から指先だけを切り落とし，人間を個人として見てしまいます。しかし自己とは，ビリヤードの玉のように固い孤立した実体ではありません。「自己」の範囲は，人間の発達段階が高まるにつれて，しだいに広がっていくものだと，米国の未来学者のヘーゼル・ヘンダーソンは力説します。彼女が作成した次の**図－3**をご覧ください。

図－3　人間発達の視点からみた「自己利益」鑑の覚醒・拡張のプロセス



出所）Hazel Henderson,Building A Win-Win World,1995,p.154を一部改作

赤ん坊から幼児の時代には，自己利益にかかわる「自己」の範囲は，文字通り本人一人だけのことです。要求を貫くために，あたりかまわず泣き叫ぶ赤ん坊の姿をイメージしてください。通常の人のばあい少年期になると，家族が「自己」利益の範囲に入ってきます。青年期になると，「自己」の範囲がコミュニティや企業団体まで広がってきます。成熟期に入ると，民族，国家まで「自己」の範囲に入り始めます。さらに視野が広い人のばあいは，動植物や死んだ人，未来世代，地球の運命までが「自己」のなかに入ってくるのです。地球市民，宇宙市民への成長の道筋を示唆する彼女の議論は，さすがにスケールが大きいですね。

自己の範囲を本人のところに限定する新古典派経済学は，幼年期の発達段階に照応した経済理論だと彼女は述べています。ほしい物を前にして「買って，買って」と泣きわめく幼児たちの世界に照応した経済理論となっており，幼年期を超えて人間が「自己」を拡張し，発達をとげていく展望を閉ざしてしまう経済学になっているのです。

精神科医の森田正馬さんは，自意識過剰の神経症患者にたいして，「ありのまま・自然体の自己の受容」を説く「森田療法」を提唱して，大きな反響を呼びました。森田さんは次のように書いています。「ある婦人が神経質性のヒポコンドリーで病床につき，今にも自分に死がやってくるものと思い，苦しんでいた。ところがある日，４歳になる自分の子が百日咳にかかり，呼吸も絶えるかと思われるばかりに咳き入るのを見て，とつぜん自分のことを忘れて子供を介抱し，そのときからはじめて自分の病気を忘れるようになった。小我へのとらわれが，わが子にたいする愛情のために消滅したのである。小我が拡大されていくありさまは，子をもつことによってはっきりと認めることができる。わが子の病気やよろこびは，わが身のことのように苦しく，またうれしいものである。子にたいするのと同じ気持ちが，さらに進んで，兄弟，親友，教え子，隣人，同郷の人などにまで拡大され，それらの人々の苦楽を自分の苦楽とするようになるとき，自我はいよいよ大きく成長，発展していくのである。仏の慈悲は，われわれが子どもを愛するように衆生を愛するといわれるものであって，

これがすなわち大我の極致である。それにたいして神経質患者は，自分の苦痛から逃れることばかりに心を労しているために，わが子も家族も犠牲にしてかえりみないことがある。これが小我の執着である」と。[23)]

中世欧州の詩人ジョン・ダンも，次のような美しい詩を残しています。「誰も，それ自身完全な離れ小島ではない。すべての人間は大陸の一部，本土の一部である。もし土くれが海によって洗い流されると，ヨーロッパはそれだけ少なくなる。それが岬であろうと，あなたの友人の領地であろうと，それは同じである。いかなる人の死もまた，私を減少させる。なぜならば，私は人類と連帯しているからである。それ故に，弔いの鐘が誰のために鳴っているのかを知るために，人を遣わす必要はない。それはあなたのために，鳴っているのだ。」ヘミングウェイは，ファッシズムと戦ったスペイン市民戦争を描いた小説を書きましたが，タイトルの「誰がために鐘は鳴る」は，この詩に由来しています。

財固有の使用価値の公正な評価

エコ・エコノミーへの転換のための２つ目のポイントは何か。購買者の自己責任論や主観的な効用論に逃げずに，財に「固有の使用価値」や生産力の質というものを事前にしっかりと評価するシステムをつくり，その評価結果を市場の価格決定のしくみのなかに反映させることだと思います。その購入と使用が，その人の「いのちの力」の拡充にどの程度役立つのか，社会（家族とコミュニティ）の領域，政治領域，そして自然領域への便益とコストがどのようなものか評価・判断できる力を育む消費者教育が大切になります。

灰谷健次郎さんは，『太陽の子』という小説のなかで，登場人物につぎのように語らせています。「むかしはくだらんものに凝ったな…人間のくらしに必要なもんとそうでないもんとの区別がつかなんだ。それがわからん人間はわやになるね。沖縄の人はえらいね。そこがちゃんとしとるさかい，人間の中でも上等が多い」と。

ブラックバスという外来種の魚がいます。ブラックバスを琵琶湖に持ち込むのは正しいのか，間違っているのか。この問題は，個人の「主観的な効用」論

に逃げていては解決できません。琵琶湖の生態系の徹底的な自然科学的研究をしないかぎりは，外来種と在来種との相性がわかりませんし，客観的な回答がえられないでしょう。同様に，外国産のある特定の財貨を貿易によって別の地域に持ち込むことが望ましいかどうかは，その地域の内発的な発展課題と移入財の特性，輸出する地域の課題とを総合して判断するほかはありません。日本と中国のあいだの貿易紛争，セーフガード問題を前向きに解決していくためにも，良い貿易なのか，悪い貿易なのかを判定し，評価できるしくみを作っていく必要があるでしょう。

経済と市場を政治・社会・自然・未来世代から切り離したり，「経済人」（ホモ・エコノミクス）の暴走を許していては，市場の価格決定のしくみに，エコロジー的真実や宇宙市民の視点を反映させることはできません。エコ・エコノミーを創っていくには，市場原理主義的な考え方を克服し，環境税や公的補助金といった国家財政のしくみを活用したり，消費者運動の力を活用することが大切です。これらの力に依拠した社会的市場経済――エコロジー的・社会的に修正された市場経済のしくみをつくっていく必要があるのです。

私有・商品化・貿易になじむ財，なじまない財

第３に，そもそも私有・商品化・貿易になじまない財は何かという点についても，しっかりと探求する必要があります。この点では経済学のよって立つ環境観・人間観が問われているのです。

「環境」とは，本来，宇宙におけるモノといのちの流れのことであり，人間は，環境（宇宙・大自然）の子にほかなりません。お釈迦さまの手の平のうえで飛び跳ねている孫悟空のようなものです。したがって，人間は，自らの力で作りだせるモノ（労働生産物）については所有し，商品として貿易することができますが，人間を作りだす基盤（宇宙における命の流れや大自然，地域社会，科学的な真理や知恵など）は，いわばお釈迦さんの手のひらにあたる部分であり，人間が所有したり，商品にしたりはできない性格のものです。

1995年に阪神地域を襲った大地震を思い起こしてください。人間は自分の所

有地が「地割れ」し液状化することを呆然とただ見ているだけでした。それらを動かしているのは，人間ではなく，自然のなかに内在する自己組織化・自己統治に向かうパワーだからです。[24] そのため，土地の売買には，欧米社会では，厳重な規制が設けられています。ところが日本では，土地取り引きの自由化が進められたために，金もうけの対象となり，地価の暴騰をまねきました。バブル崩壊後の日本の状況をみると，土地の際限なき商品化・市場化を強行したことの報いが，いまなお我々を苦しめていることが分かります。

両者の中間領域たる，再生不可能資源，水資源，食と農，ケアと教育，学術文化などについても，通常の労働生産物とは異なる扱いをしないと，人類の生命の根源を枯らしていくことになるでしょう。たとえば，生存に必要な最低限の飲み水や食料，エネルギー，エイズ治療のための薬，保健衛生，公教育などは，「商品」という規定よりも「人権」という規定が優先されるべきです。何人にも保障されるべき「生存権」の基盤だからです。

人間の労働力の取り引きについても，十分なルール設定をしないと，下向き競争の圧力に際限もなくさらされてしまうでしょう。これがデフレーションの本質です。社会的規制の弱いところでは，子どもや女性などの社会的弱者たちが，事実上の「奴隷」にされてしまう事例が激増しています。[25]

民族のアイデンティティを形づくる文化財についても，貿易を制限し，これまで大国が略奪・輸入してきた文化財はすべて母国に返還すべきでしょう。そうしないと，弱小な民族は，その魂と言語・文化を失い根無し草となり，グローバル市場をただよう「幽霊」となっていくほかないからです。[26]

先住民族，死者・未来世代，生物との支えあい

大量生産・大量廃棄の資本主義文明は，あまりに退廃し，袋小路に入りこみましたので，現存メンバーの力だけでは，もはや文明を刷新できないかもしれません。歴史上，そのような自浄能力・自己変革能力を失った文明は，自滅の道を歩みました。

ただし，汚染されていない「未開の民族」との接触が，袋小路に陥った文明

を救ったこともありました。エンゲルスによると，古代ローマ帝国の奴隷制文明を救ったのは，ゲルマン（ドイツ）の未開民族でした。古代ローマ末期の「ヨーロッパを若返らせたのは，…・ドイツ人の未開性，彼らの氏族慣習，彼らが生きていた母権制社会の遺産［であった］。…・じっさい未開人だけが，瀕死の文明に苦しむ世界を若返らせる能力をもっている[27]」

したがって第４のポイントは，「狭い経済人」としての視野から私たちを解き放ち，先住民族，死者・未来世代，生物との支えあいの関係を作り出すことにあると思います。沖縄の基地移転・拡張に反対する運動をみるとき，沖縄住民の１/3に及んだ死者たちの声，これから生まれる子どもたちへの社会的責任の感覚，それにジュゴンやオオタカといった動物たちの声も，生きている者の心を動かし始めたことが分かります。

ボランティアの心をもった「大我の人」に

今日の経済を平和的な手段で，エコ・エコノミーに作り変えていくにはどうしたらよいのでしょうか。様々な学者や実践家，政治家が，この問題にとりくんできました[28]。まずは人類の模索の到達点をしっかりと学んでください。そのうえで，この課題の解決のために自発的（ボランタリー）にとりくんでほしいと思います。

「ボランティア」とはどんな人のことなのでしょうか。「言われなくてもする人」という定義だけでは不十分です。「言われてもしない人」のことでもあるのです。アフガンの難民問題にとりくむ日本の開発支援 NGO の若者たちが，日本の外務省と政治家の古い体質に風穴をあけたことは，象徴的でした。

人間は，地球上の食物連鎖の頂上に位置しています。哲学者の鎌田東二さんは，次のように書いています。「人は，…大きな食物連鎖のなかにあって，今度は自分たち人間が食べられる番として，もっと大きな存在（宇宙）のための，どんないいお供え物になるか，自分たちを贈与できるか」――これが，私たち人間が「万物の癌細胞」ではなく，「万物の霊長」であることを立証するカギであると[29]。

最後に「ボランティア」として生きる喜びを歌った２つの詩を皆さんに贈ります。アジアで最初のノーベル文学賞をもらったインドの哲人，ラビンドラナート・タゴールは「人生の喜び」をつぎのように歌いました。「私は眠り，人生は喜びだという夢をみた。私は目覚め，人生とは奉仕だと知った。私は行動し，目をこらす。奉仕は喜びだった。」

いま一つは，アッシジの聖フランチェスコの「平和の祈り」です。「わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。憎しみのあるところに愛を，過ちのあるところに許しを，分裂のあるところに一致を，疑惑のあるところに信仰を，誤っているところに真理を，絶望のあるところに希望を，闇に光を，悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。慰められるよりは慰めることを，理解されるよりは理解することを，愛されるよりは愛することを，わたしが求めますように。わたしたちは，与えるから受け，ゆるすからゆるされる自分を知り，自分を捨てて死に，永遠の命をいただくのですから。」[30)]

注

1）　シュミット・ブレーク（佐々木建ほか訳）『ファクター10』1997年，シュプリンガー東京。

2）　国連の『人間開発報告書　99年版』によると，世界の豊かな層（世界人口の上位の１／５）と貧しい層（下位の１／５）との資産格差は，1960年には30:１だったが，90年には60:１に拡大し，98年には78:１となった。98年版の『同報告書』によると，世界のもっとも豊かな225人の資産総額は１兆ドルを超えており，世界の下位所得層47%（25億人）の年間所得に匹敵するに至っているという。なおデービッド・コーテン『グローバリズムという怪物』1997年，シュプリンガー東京も参照

3）　スチュアート・カウフマン（米沢富美子監訳）『自己組織化と進化の論理』1999年，日本経済新聞社，16～17，24，35ページ

4）　佐治晴夫『宇宙の風に聴くー君たちは，星のかけらだよ』1994年，かたつむり社，44ページ。海部宣男『宇宙史の中の人間』1993年，岩波書店

5）　ウイリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』97年，三田出版会

6）「36億年の歴史を持つ DNA の発する強い力と，たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化

と DNA』地涌社，1991年，６ページ）

7） ハーヴィー・ダイアモンドほか『ライフスタイル革命――私たちの健康と幸福と地球のために』99年，63・66ページ。村上和雄『サムシング・グレートー大自然の見えざる力』1999年，サンマーク出版，136ページ，伊田広行『スピリチュアルシングル宣言――生き方と社会運動の新しい原理を求めて』03年，明石書店

8） 諸富祥彦，『生きていくことの意味』PHP 新書，01年，53～65ページ。諸富祥彦『どんな時も人生に YES を言う』1999年，大和出版，124～131ページ。

9） フリードリッヒ・エンゲルス「自然弁証法」邦訳『マルクス・エンゲルス全集』，20巻，352・358・492ページ。ただし，訳文の一部を改めた。

10） 高木善之『地球大予測』1998年，サンマーク出版，140～141ページ

11） アンドレ・ランガネーほか『人類のいちばん美しい物語』02年，筑摩書房，参照。

12） 内山節『市場経済を組み替える』1999年，農文協，211ページ。

13） レスター・ブラウン『エコ・エコノミー』2002年，家の光協会，27ページ。ポール・ホーケンほか『自然資本の経済――成長の限界を突破する新産業革命』01年，日本経済新聞社，ジェレミー・リフキン『エイジ・オブ・アクセス』01年，集英社，254ページ。

14） アルバート・ハワード『ハワードの有機農業』上，02年，農文協，33-34ページ。

15） 福士正博『市民の新しい経済学』2001年，日本経済評論社，156ページ。

16） 清水満『共感する心，表現する身体――美的経験を大切に』98年，新評論，129～137ページ。

17）「眠りという状態のなかで，いのちのつながっている無数の人たちと愛を分かち合い，エネルギーをもらい，心と身体の疲れを癒し，新しい息吹に満たされて目覚める。これが本当の眠りの意味です」鈴木秀子『愛と癒しのコミュニオン』99年，文春新書，178ページ。

18） ３領域への区分については，カール・ポラニー（吉成英成ほか訳）『大転換――市場社会の形成と崩壊』1975年，東洋経済新報社，古沢宏祐「文明の転換が必要だ」『世界』1997年12月号，磯辺俊彦『共の思想――農業問題再考』2000年，日本経済評論社，５～14ページ，福士正博『市民の新しい経済学』2001年，日本経済評論社，152ページを参照。

19） 実現しようとする価値という視点から，３領域の関係を見るとどうなるか。「経済」という領域では，封建時代の制約からの解放を求めて，「自由」という価値を追求してきた。しかし「自由」だけを追求すると，貧富の格差が広がり，連帯感の薄い社会となる。そこで「政治」領域では，国民の公正なとりあつかいを

重視し，「平等」という旗をかかげて「自由」の行き過ぎをチェックしようとする。しかし「自由」原理と「平等」原理だけに任せておくと，両原理はたえず衝突し，ぎすぎすした関係になる。そこで「友愛」という旗を掲げて登場するのが，「社会・文化」領域なのだ。フランス革命の際に，民衆が「自由・平等・友愛」という旗を掲げたことをご存知だろうか。３つの価値の間のバランスのとれた国づくりの夢を，彼らはこの旗に託そうとしたのである。河村厚徳ほか『エンデの遺言』2000年，NHK 出版，37・76ページ。

20）　米国では，1990年の国民所得総額（貨幣で支払われた額）の78%が経済領域で支払われ，国家領域で支払われたのは全体の15%，社会・文化領域で支払われたのは，７%にすぎなかったという。磯部俊彦『共の思想――農業問題再考』00年，日本経済評論社，５～14ページ。

21）内村鑑三『デンマルク国の話』1911年，岩波文庫。清水満『生のための学校』1997年，新評論を参照。

22）鈴木有郷『ラインホールド・ニーバーとアメリカ』1998年，新教出版社，139ページ

23）森田正馬『生の欲望――あなたの生き方が見えてくる』1999年，白揚社。

24）マルクスはこう書いている。「一つの社会全体でさえも，一つの国でさえも，じつに全ての同時代の社会をいっしょにしたものでさえも，土地の所有者ではない。それらはただ土地の占有者であり，土地の用益者であるだけであって，それらは，よき家父として，土地を改良して，つぎの世代に伝えなければならないのである。」マルクス『資本論』全集版，995ページ。

25）ケビン・ベイルズ『グローバル経済と現代奴隷制』02年，凱風社，参照。

26）経済評論家の内橋克人さんは「FEC 自給圏」を提唱されている。氏によれば，食料（food），エネルギー（energy），人間のケア（care）は，できるだけ地域で自給をしなければならない。生命活動に直接にふれる部分は市場原理だけに委ねてはならないという。

27）エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』全集版21巻，156～157ページ。同様のことを沖縄の歌手の喜納昌吉は，こう語っている。「沖縄とネイティブには自由がないが，平和がある。アメリカと日本には自由があるが，平和はない。私たちは，この溝を埋めていかねばならない」と（鎌田東二・喜納昌吉『霊性のネットワーク』2000年，青弓社）。

28）この点を明らかにした素晴らしい本に，ワールド・ウオッチ研究所創設者のレスター・ブラウン『エコ・エコノミー』（2002年，家の光協会）とポール・ホーケンほか『自然資本の経済』（2001年，日本経済新聞社）がある。また私も，そのための経済改革構想を発表しているので，参考にしていただきたい。藤岡惇「持

続可能な日本づくりのアジェンダの提案」森岡孝二ほか編『二一世紀の経済社会システムを構想する』2001年，桜井書店。関連して，ジェームズ・ロバートソン（石見尚訳）『21世紀の経済システム展望』99年，日本経済評論社も参照されたい

29）鎌田東二・喜納昌吉『霊性のネットワーク』99年，青弓社，120ページ。また神戸元気村代表の山田和尚さんの著書『いのちの力をつかまえろ』2000年，サンマーク出版，102ページも参照。

30）ノーマン・カズンスとともに，原爆乙女25名の米国での整形手術運動を推進した谷本清牧師（広島流川教会）の長女の近藤紘子さんから教えていただいた。